水辺だより

1994年7月

暑い夏です。みなさま元気でおすごしですか。

知らず知らず水辺に体が向いてしまいます。

今シーズン、海水浴や川遊びはされましたか？おハガキでお知らせした通り、7月17日（日）には、水辺の会でカヌー体験をやりました。

参加した川瀬さんに体験記を書いてもらいました。（→次ページ）

参加者は約２０名。晴天に恵まれ、はじめての人も（子供達も）、思い思いに川に漂って、楽しい水辺の思い出をつくっていたようです。

今回カヌーを指導してくれたのは、駿河台大学で野外活動を教えている土方幹夫さんでした。土方さんから最初に、水に体が浮くしくみや、もし溺れたらどうしたらよいかといった簡単な、でも重要な解説をしてもらいました。実際にカヌーを漕ぎだしてからも、適切なアドバイスとまあ適当に楽しんでという絶妙の指導体制で望んで下さったのでこちらはのびのび体験できました。ありがとうございました。

また実施する機会がありましたら、今回来られなかった人もぜひどうぞ。

福島潟のオニバスサミットに参加しよう！ 8月２０，２１日

先号でもご案内したオニバスサミットのカラーパンフレットを同封しました。

みなさま　ご一緒に参加しませんか？　裏方手伝いでも正式参加でも構いません。都合のつく方はお誘いあわせていきましょう。

参加申込み期限は過ぎています。正式参加を望まれる方は至急８月１日までに返事を送ってください。裏方希望であれば、水辺の会の方へ連絡してください。人手が足りなくて困っているよー。

カヌーの楽しみ方、色々

川瀬　詠子

カヌーは自分の力で水面を自由に動き回るユニークな乗り物です。でもそれだけがカヌーの魅力ではありません。参加したみなさんが口を揃えておっしゃたことには、「いつもと違った川の眺めである」とのことでした。土手の上、橋の上、川の淵のいつもの眺めと比べると、川の真ん中、水面際からの視界は、新たな発見といえそうです。そんなふうに「やってみて初めて解った、なるほど」という発見が、私だけでなく皆さん、沢山あったかもしれません。

まず驚いたのは、まるで自分の手のようにオールを使っていることでした。それを見て、「スイ～スイ～」と進のを目標に、カヌーに乗っていました。でも流れに逆らい、一生懸命上流へ進もうと努力するのですが、くるくる回転してなかなかうまくいきません。「これは、水にオールを入れるタイミングと力の入れ具合に原因があるに違いない」と工夫を重ねるのですが、今ひとつうまく行きません。

そうこうしている間に、カヌーの底を通じて感じる水の流れに気がつきました。これをクリアーすれば何とか乗りこなせると思いながらも、それは一先ず置き「川の流れに任せて流れていくのも面白そう」と、木の葉のように流れてみることにしました。

目をつむると、あんなに一生懸命前に進もうとしていた頃は解らなかったのに、川の流れが、早さが、どこで、どのくらい変わるのかが解ったようでした。そして、風が流れとは逆に吹いているせいか、水の流れとは逆の方向にカヌーが流されていくのも解りました。

昔話や童話にもこんなシーンがありました。一寸法師に、桃太郎、おやゆび姫、小説では赤毛のアン、マークトウェインにもあったかも知れません。

ふと思っただけなのですが愉快でたまりません。十人十色、皆なんて可笑しな乗り物にのっているのでしょう。子供の頃は何の不思議もありませんでしたが、何て妙な話なのでしょう。こんなインパクトの強い乗り物が登場するというのは、十分、演出効果なのかも知れません。しかし、お椀の安定性はどうなのでしょうか？ちゃんと前に進めたのでしょうか？そこにいくとカヌーの安定性は優れたもので、初心者にもある程度はたやすくできます。

カヌーは原始的で、とてもシンプルな乗り物のようですが、それ故にカヌーに乗っている者には自然との対話や、バランス感覚に満ちた精神が要求され、それが自然に身に沁み込んでいくような気がしました。「カヌーは体で覚えて下さい」と土方さんがおっしゃっていました。川の流れや速さ、カヌーのスピード、水の深さ、水だけでなく風等をも肌で感じることができた時、思うようにカヌーを操れるのかもしれません。

そんな風に思ったのは、おそらく『リトル・トリー』という、あるアメリカ原住民の少年時代の自伝的小説を読んだせいでしょう。アメリカ原住民の自然に対する

感性、精神、鋭敏な感覚、すぐれた運動神経と体力、そういったものは、私達日本人にとって完全には解らないであろうし、想像にすぎないものなのでしょう。それでも動物としてのヒトの内面的な部分、あるいは本能的なレベルで共鳴するものでもあるのでしょうか。こうしてカヌーをやってみると、少しでも彼らの精神に触れることができたような気がします。

こんなことを色々考えて、のんびり過ごしていました。ちょっと異端なカヌーの楽しみ方かもしれませんが、私にとって川を自由に動くだけがカヌーの魅力ではありませんでした。皆さんはどうなのでしょうか？ カヌーの経験を問わず、カヌーに対する想い、イメージ、感想など、聞いてみたいものです。これをネタにカヌー談議をしてみるのも面白そうです。もっと沢山、楽しそうなカヌーの過ごし方があることでしょう。

夏やすみ ワンポイント ちしき

テーマ 『みずむし』を知ろう

みず-みち[ミッ]【水道】水の通う道。水脈。

みず-みまい[ミヅミ]【水見舞】水害の見舞。

みず-むけ[ミッ]【水向】①霊前に水を手向けること。②水を向けること。→水(成句)

みず-むし[ミッ]【水虫】①半翅目の水生昆虫。フウセンムシの近縁種でこれに酷似しやや大形。長さ一〇ミリメートル。→フウセンムシ。②甲殻類等脚(とうきゃく)目の節足動物。形はワラジムシに近く、体長約九ミリメートル。池・溝・水田などの淡水に最も普通な動物。日本各地に分布。③てのひら、足のうらなどに発する小水疱疹。汗疱様白癬(かんぱうようはくせん)がその主なもの。汗疱(かんぱう)。水瘡(みづくさ)。

みず-め[ミッ]【植】ヨグソミネバリの別称。

みず-めがね[ミッ]【水眼鏡】水中で見ることができるようにした眼鏡。水中眼鏡。

みず-めし[ミッ]【水飯】水漬けの飯。水かけ飯。すいはん。

みず-もち[ミッ]【水餅】黴(びか)または罅(ひび)などのできぬように水に漬けて貯える餅。

みず-もの[ミッ]【水物】①水・酒などの液体。流動物。②酒以外の飲みもの。氷水・ソーダ水の類。③水分を多く含んでいる食品。果物・くずもち・水羊羹の類。④

み-ずら【見面】見たよ

み-ずら[ミッ]【角髪・角子・いう)古代の男子の髪い方。頂の髪を中央右に分け、耳のあたがねて緒で結び耳の先れたもの。後世の総角はその変形。びんずずら。神代紀上「髪(みず(ぁ)げて一に為し」

み-ずら-し【見辛い】〔形に堪えぬ。②見にくい

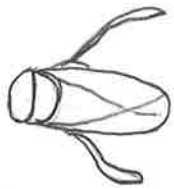
みず-ろう[ミッ]【水牢】江戸屋に入れて苦痛を与え

みず-ろん[ミッ]【水論】⇒水

みず-わ[ミッ]【水輪】水面に

みず-わらび[ミッ]【水蕨】水ダ植物。淡緑色で柔か縁は巻き込む。

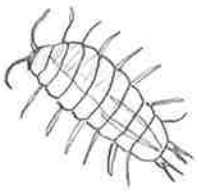
みず-わり[ミッ]【水割】①(



スイスイ

① ミズムシ (ミズムシ科)

大きさは 10ミリほど 黒っぽい色
水草の多いところに集団でいる。
羽の下に空気の泡をもったまま
水中にもぐり、中足で植物に
つかまっている。
泳ぎながら、チ、チ、チ、と鳴く
この音は福島潟や佐渡島で
よく聞こえる。



② ミズムシ (ミズムシ科)

大きさは10ミリほどで平たい形をしている。
色は黒褐色で 淡いまだらがちらばっている。
水中のダンゴムシといったおもむきあり
湧き水のところが好きのようだが、かなり汚れた
水にも耐えて生活できる。

イラストは正確でない。
図鑑を見られたし。

参考：広辞苑
：新潟県陸水動物図鑑

【新入者登場のコーナー】（その２）

―知野（ちの） 泰明（やすあき）―

連載２回目は，前回予告の通り，私が幼少時代から今までの経験の中でどのように歴史好きになって行ったのかの話しを進めたいと思います．

私の場合，歴史への興味は考古学が最初でした．幼稚園の頃から，幼いながらも，なぜか恐竜や土器，埴輪などに心引かれ，よく自宅近くの広場や道路をスコップでほじくり返し，それらの遺物が出てこないか探し廻っていました．一見すると異様な子供であったかもしれません．しかし，いくら掘っても砂丘地に立つ自宅付近では，それらは見つからず，また，子供ながらに自分が掘れる程度の深さに，遺物があるわけないと悟り，いつしか，そのほじくり癖は石拾いに転じてしまいました．いずれにせよ，この頃の経験が，私の歴史好きの根底を流れるものとなっていったのは間違いありません．

小学校に入学すると，暫く歴史とは縁遠くなっていました．しかし，３年生の時に奈良・京都へ家族旅行をする機会に恵まれ，日本の古都や様々な寺院，仏像に触れ，こんどは日本の歴史的文化という面から，歴史への興味が湧いてきました．小学校の高学年からは歴史の授業も始り，中学，高校でより専門的な日本史の授業を受ける中で，いつしか，私は完全に歴史好きとなっていたのです．高校時代の通知表を見ると，数学よりも日本史の成績が良かったことに，その事実が現れています．

しかし，高校時代の終りに近づき，大学進学という現実の前で，人生の選択を迫られることになりました．この時，私は考古学への進学も考えましたが，当時，それほど現代のような発掘ブームはなく，発掘を職業としてもどこぞの教育委員会で細々と発掘調査を行うのでは飯も食いはぐれるのではないかと考えてしまいました．そこで，就職が有利な工学部を鉾先に，その中でも，私の別な趣味である絵を描けそうな建築か土木に進学することにしました．なんと単純な動機でしょうか．

結局，大学へは土木工学科へ進むことになりました．私の入学年次では２年生から本格的な専門教育が始りました．この２年次における金曜の１限は授業がなく，３年次向けの河川工学が開講されていました．先輩から「単位は，できるだけ早めに多く取っておくと後で楽だ」という不純な助言もあって，河川工学も受講することにしました．この授業の担当が他ならぬ大熊先生であった

のです.

大熊先生の河川工学の授業は，教科書は使わずに先生独自の見識が講義の中心でした．その中で河川に関する歴史的な内容も含まれていたのです.ここで，私の眠っていた意識が目覚めたのは言うまでもありません．つまり，土木にいても歴史に触れることができるのだということに気付き，卒業研究は土木史を対象にしようと決意したのでした．この学年の春には，クラスで研修旅行がありました．この旅行に大熊先生も参加されていたのですが，その懇親会の自己紹介で，私は土木史を研究すると宣言したのが今に至る道のりの始りでした．４年生になって，いよいよ卒業研究が始ります．私は，迷わず大熊先生の研究室に入り，私の土木史研究人生がスタートしたわけです．これ以降の研究活動や成果について，いよいよ次号から紹介していくことにします.

事後談をもう少し•••．とりあえず,土木史の研究をメインにいつしか最高学府までたどり着いた私でしたが，その修了後，なかなか就職も見つからず，大熊先生の紹介あって，新潟市教育委員会へ非常勤としてお世話になることになりました．その勤務内容は偶然にも発掘調査や整理作業であり，私にとっては幼少時代からの夢が不思議にも今，現実となっているのです.

最後に，近年の発掘状況について少し触れさせてもらいます．現代の公共事業や宅地開発を行う場合，その土地の下に遺跡があることが予想される場合，必ず発掘作業を行うことが法律で義務づけられています．こうした手順が，定着して発掘調査の機会が増加する中で，行政側では逆に発掘を行う専門員の数が不足し，発掘作業の進行に支障をきたすといった状況が発生しています．これは，同時に公共事業や宅地開発の進行の遅れをも意味するものであります．ある町村役場では，土木課の職員が発掘作業の研修を受けている有様です．こうした状況を目の当りにすると，私の10代における人生の選択も見通しが甘いものであったことがわかります．しかし，今の自分を考えると，その選択に不満はありません.

では，こうした世相の中で，どのように専門員を育てたらよいのかについて少し提案させて頂きます．　私の経験による考古学へのあこがれを考えた場合，考古学の専門家を育てたければ，教科書だけでは不十分であり，より現実的な経験や印象を幼少の多感な時期から植付けることが有効ではないかと思われてなりません．こうした経験を重視する教育方法は，考古学に限らず，他の分野でも通用する方法ではないでしょうか．しかし，現代の道路の多くがアスファルトで敷詰められ，また交通量も増えた中，発掘好きの子供達が育つ環境は少なくなりつつあると言えるでしょう．また，子供達に学校と塾の勉強に多くの

時間を割くことが喜ばれる今日，私のようないじる・見るといった観点からの教育方法は，歓迎されないかもしれません．大学などの高等教育によって，確かに多くの専門家が養成されていますが，より主体的に，そして，能動的な専門家を要求するのであれば，本人の知識力のみでなく，自らの心までも，その専門内容に向けさせる必要があるのではないでしょうか．こうした能力は，学校教育のみでは，なかなか育たないのではないかと思う今日この頃です．

すこし，余談が長くなってしまいました．また，経験と考察不足にもかかわらず好きなことを述べてしまいましたが，若僧の独り言として読み流して頂けたら幸いです．　（つづく）

これからの予定

８月に予定していたカヌー大会を７月17日に急遽実行しちゃいました。

７月予定の（ビール・バーベキュー大会「常浪川」　in 上川村）は延期します。おそらく９月以降になるものと思います。日取りが未だ決っていません。ごめんなさい。

・８月13日　　吉野川発　川フォーラム　　in 徳島市　詳しくは水辺の会事務局へ
・９月10・11日　水郷水都全国会議　in 釧路
・９月23・24日　ウォーターフロントサミット　in 神戸　詳しくは水辺の会事務局へ
・９月　　ビール・バーベキュー大会＆ウォッチング「常浪川」　in 上川村
・**１０月１日　　水辺の会７周年記念イベント　in万代市民会館（新潟市）**
　　基調講演は内山節さん（哲学者）を招くことに決定しました。
・１１月　　ウォッチング『三面川・荒川』／勉強会『伝統的河川工法』
・１２月　　忘年会

いやぁー、８月13日の吉野川のフォーラムのポスターには、びっくりしました。筑紫哲也、本田勝一、近藤正臣と並んで大熊先生の大きな顔写真が載っているのです。他の３名と比べてもまったくひけを取らない渋い顔をしていました。

プロフィールによると、３０日３０日いっぽんぽんの近藤正臣さんと大熊先生は同じ年であった。

編集後記

★もうすぐ新潟まつり。わたしは初めて市民神輿をかつぐことにしています。でも毎日冷房の効いた部屋で過している身体にはちょっとハードな運動なので、だいじょうぶかなぁ？

神輿のあとの美味しいビールと枝豆を楽しみにがんばろっと。

★会員の星島卓美さんは鳥野潟農協ビルで食堂番小屋を経営しています。カヌーの時はみんなの昼食にカレーを作ってきてくれました。あまりおいしかったので、冬の水辺の会忘年会は星島さんのところでやっちゃおうと決定しました。

★夏バテしないよう　元気でおすごしください。　　川口（米）